

フェア
キュレーションを公平に拡張する vol.2

「君のための絵」

Extend curation fairly vol.2: A Picture for You





目次

1	はじめに	一般社団法人 HAPS	3
2	阿部美幸		4
3	田湯加那子		26
4	キュレーターによる展覧会ステイトメント：「君のための絵」		55
5	作品リスト		56
6	「君のための絵」を受け取るために	藪前知子	59
7	女性作家とその制作環境について	奥山理子	65
8	開催概要		68
9	作家プロフィール		69
10	主な出品歴		70



A PICTURE FOR YOU

はじめに

本事業は、これまで「アール・ブリュット」などの名称で呼ばれてきた障害がある人たちの表現領域を、現代美術の分野で活動してきたキュレーターが調査し、展覧会を企画するものです。近年、障害のある人たちの表現活動は大きく発展し注目も集めています。しかしそこには、彼らの表現を、特別なものとみる視点が存在していることも確かです。「芸術家」や「作品」といった概念は誰がどのように決めてきたのでしょうか。彼らの作品を見るときに自然に浮かんでくるこの問いから、私たちは、当たり前のように使われてきたこれらの言葉について、いまだ十分に議論が尽くされていないことに気付かされます。個人のこだわりから生まれる何かが、表現になり、社会に出て広く他者に共有される「作品」になる。これらの概念は、本来このプロセスの過程で、その都度考察され、更新されるべきものではないでしょうか。こうした考え方を、一般社団法人HAPSとキュレーターが共有した上で生まれたこの展覧会が、障害のある人たちの表現活動が広がる、一つのきっかけになることを願っています。

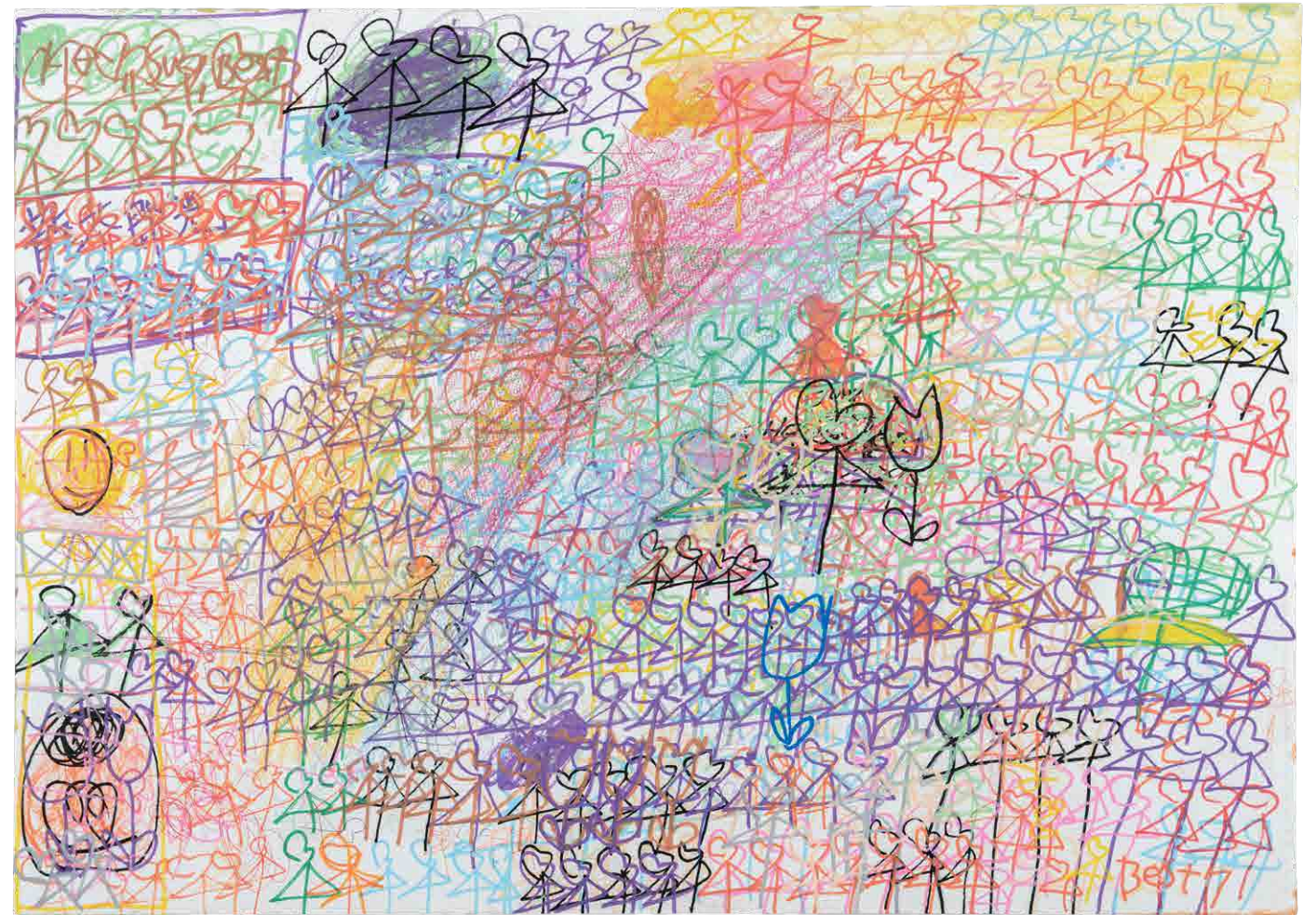
一般社団法人 HAPS





Small white label with text, likely an artist name or title, positioned below the first painting.

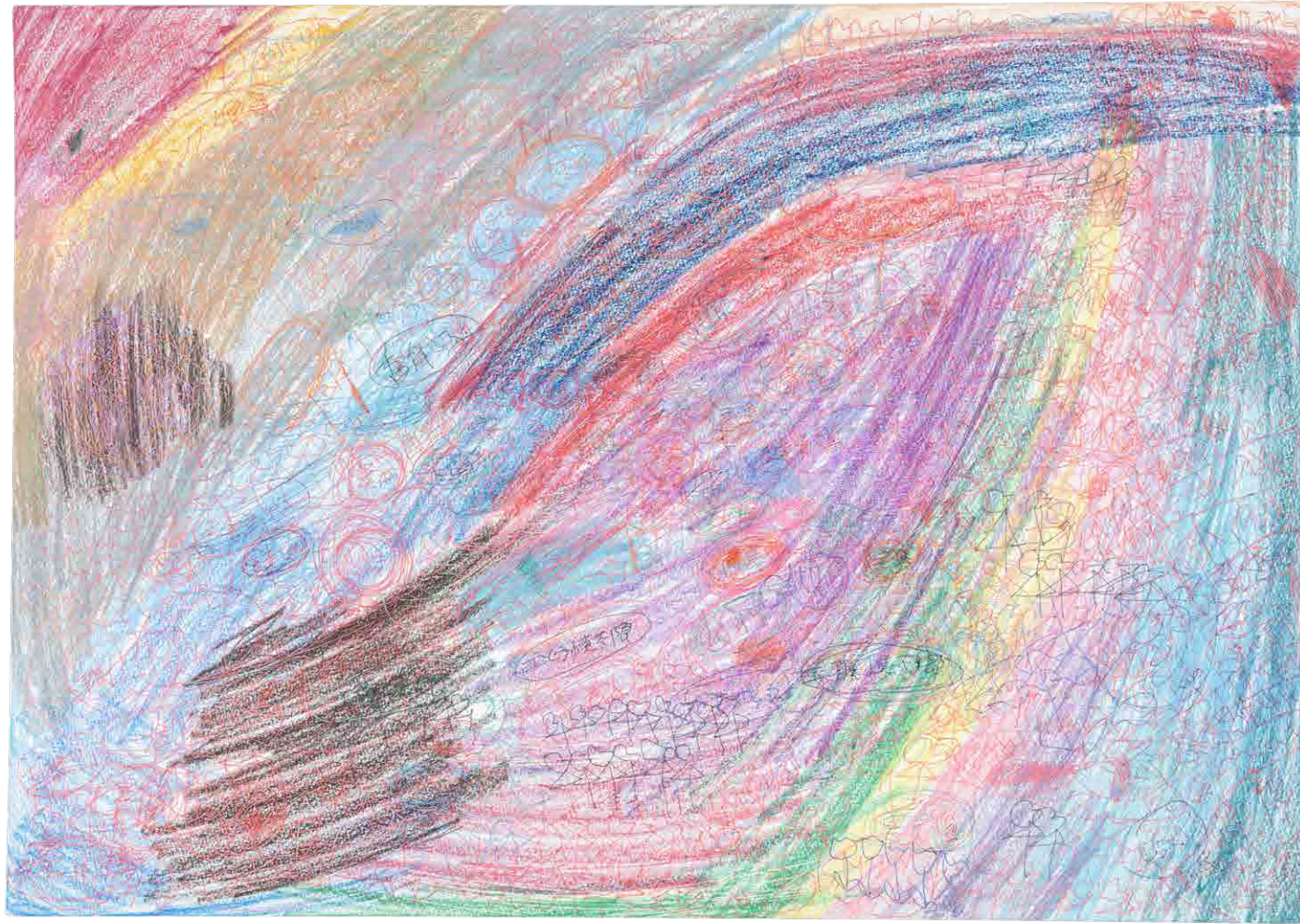








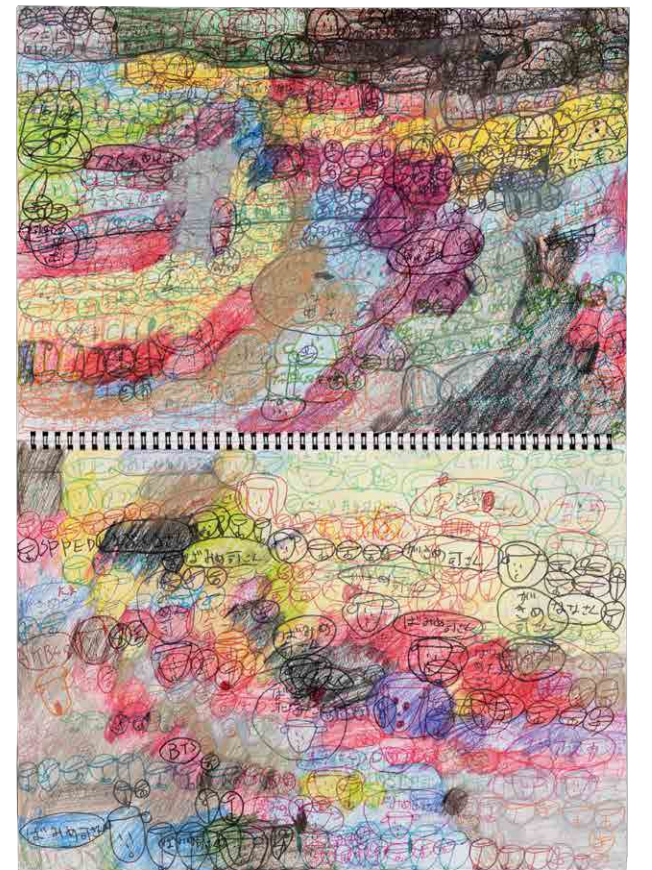


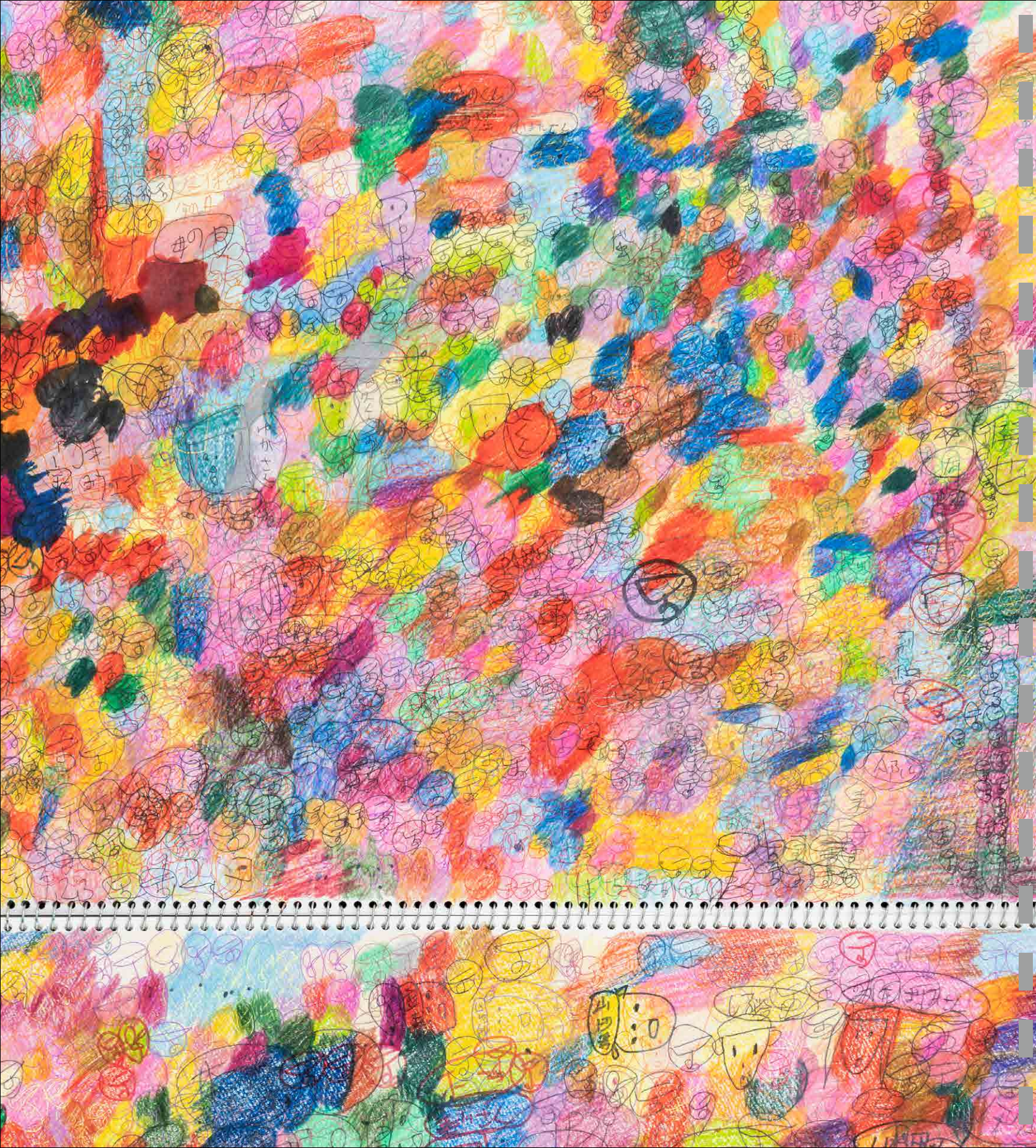


阿部美幸

田湯加那子









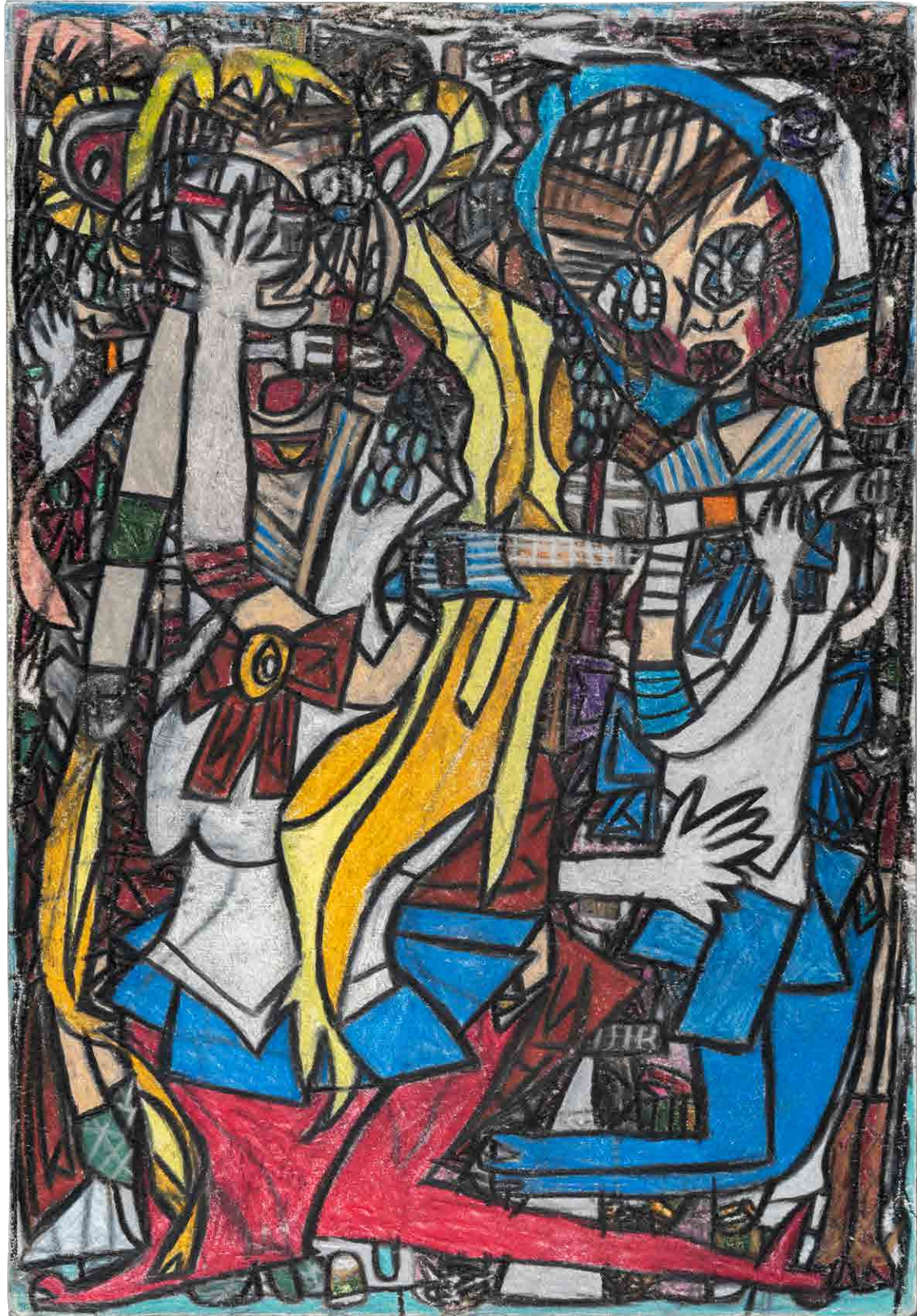


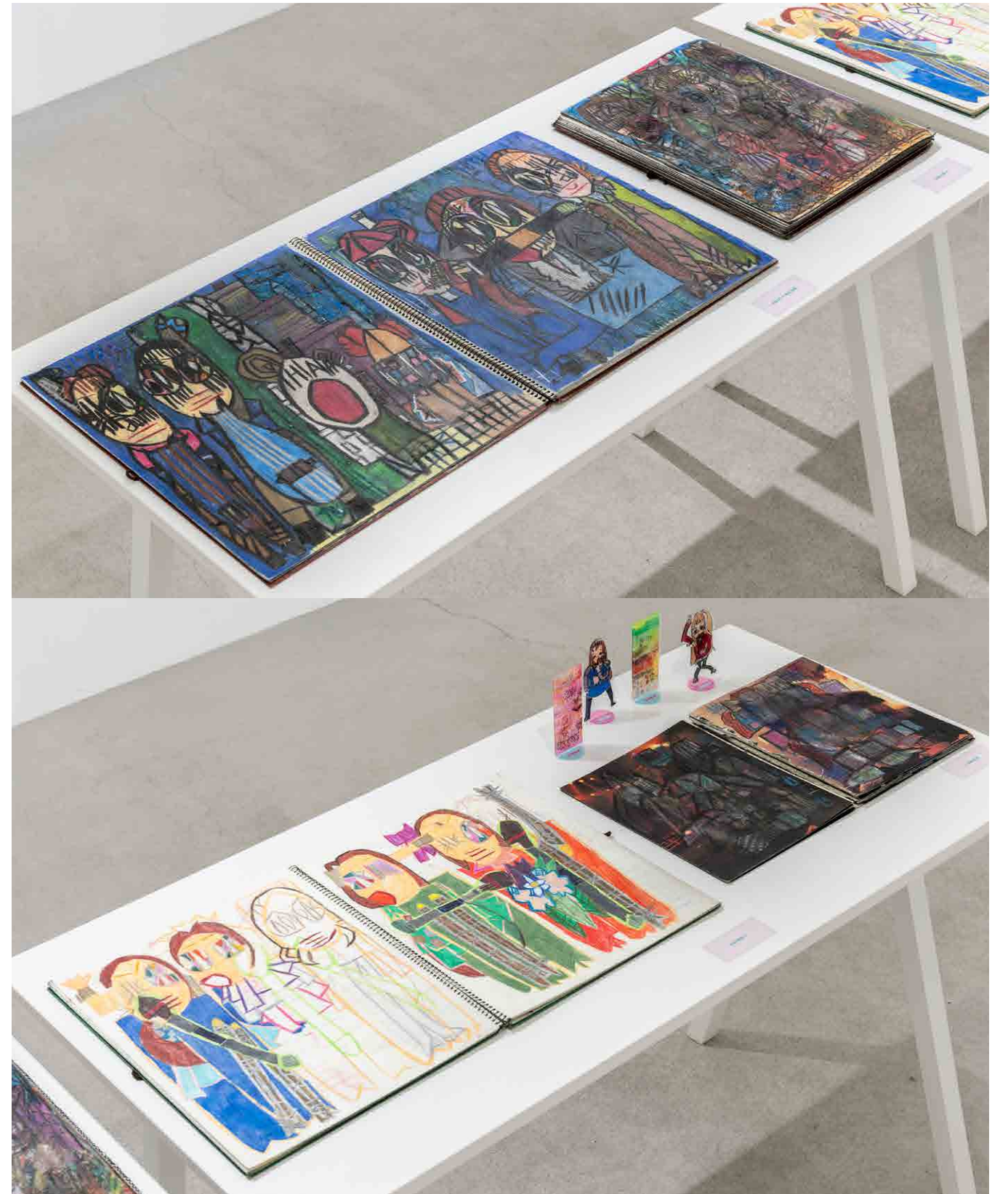




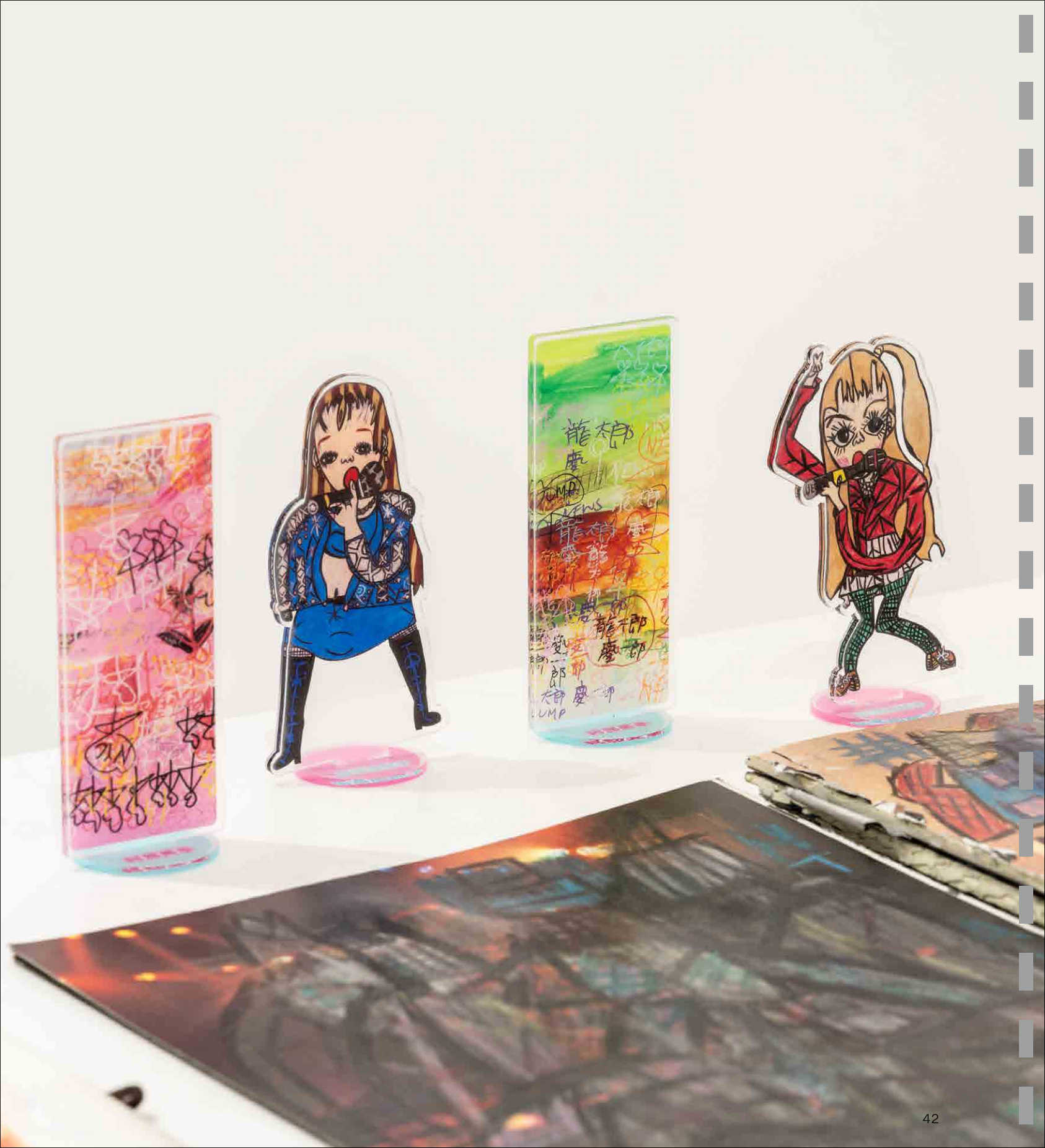


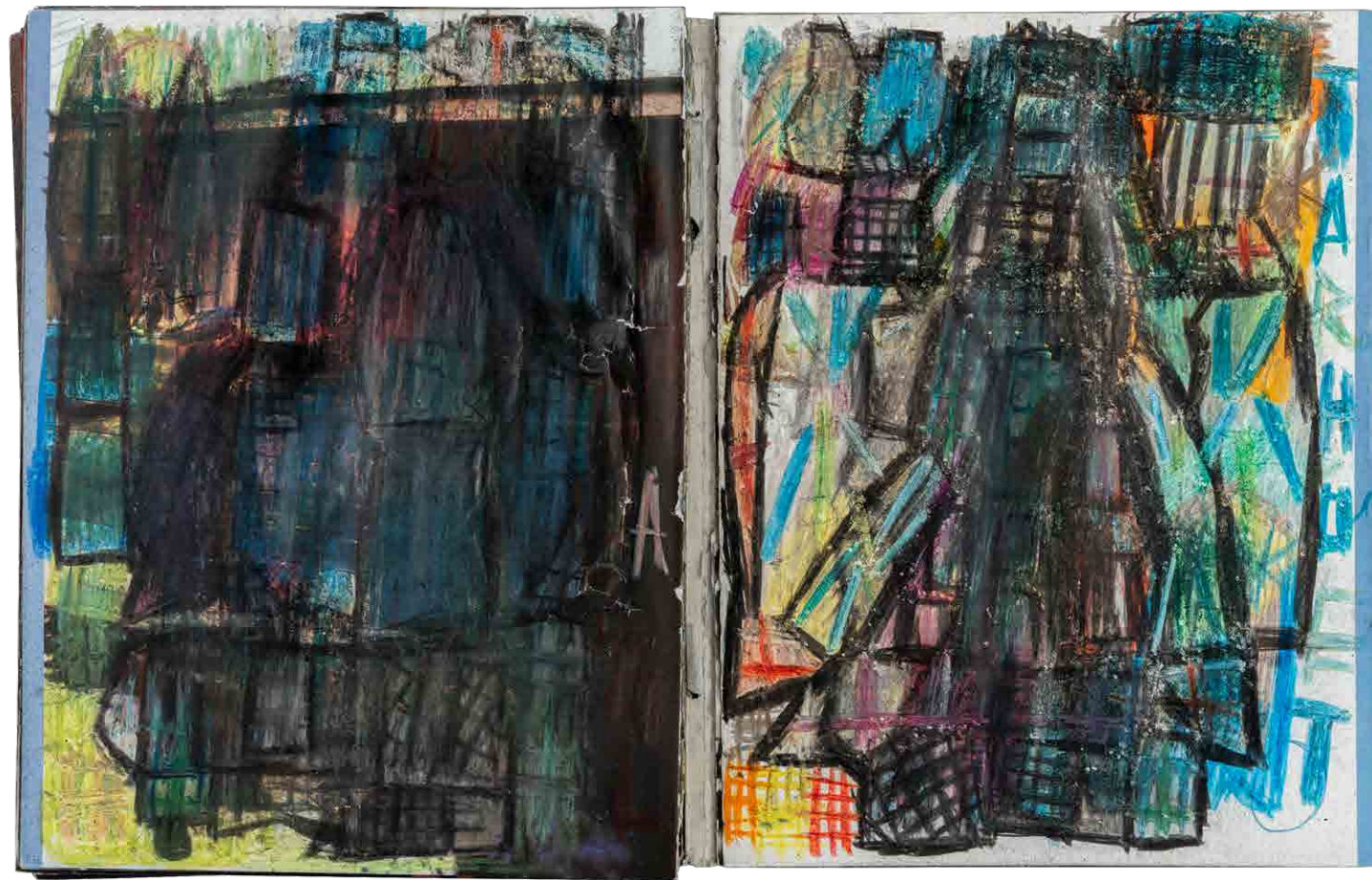


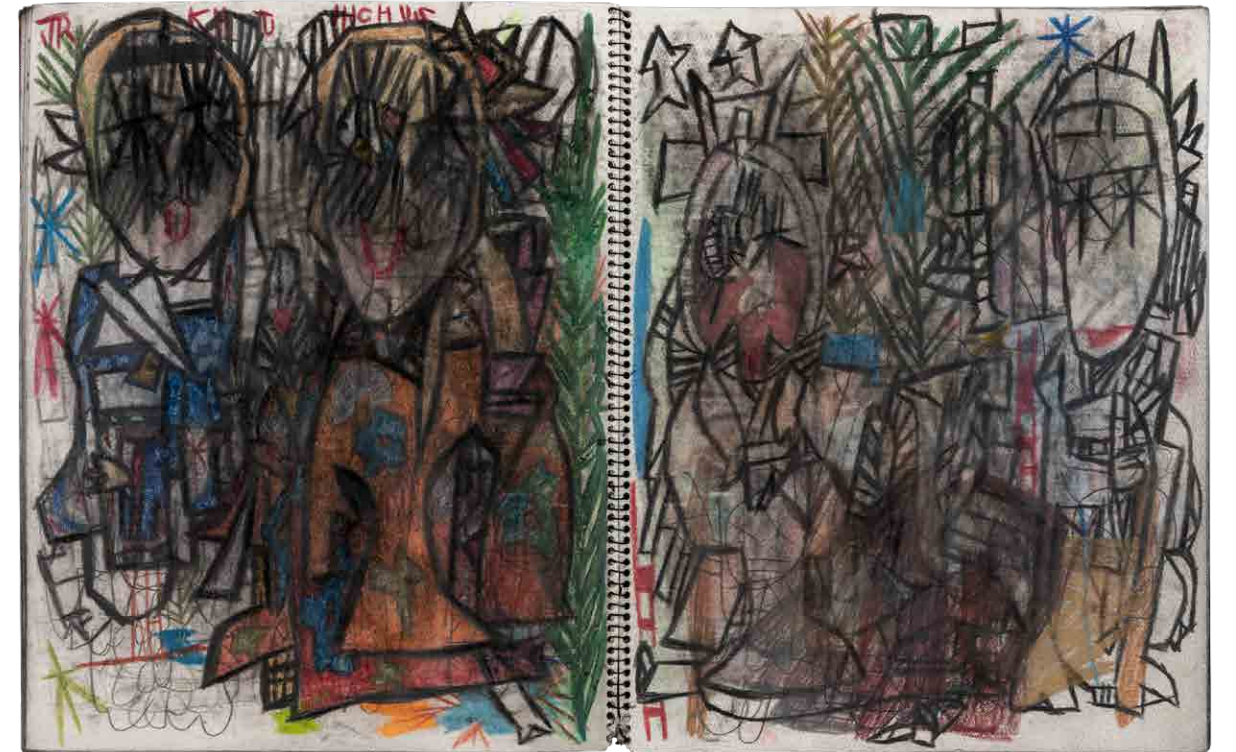
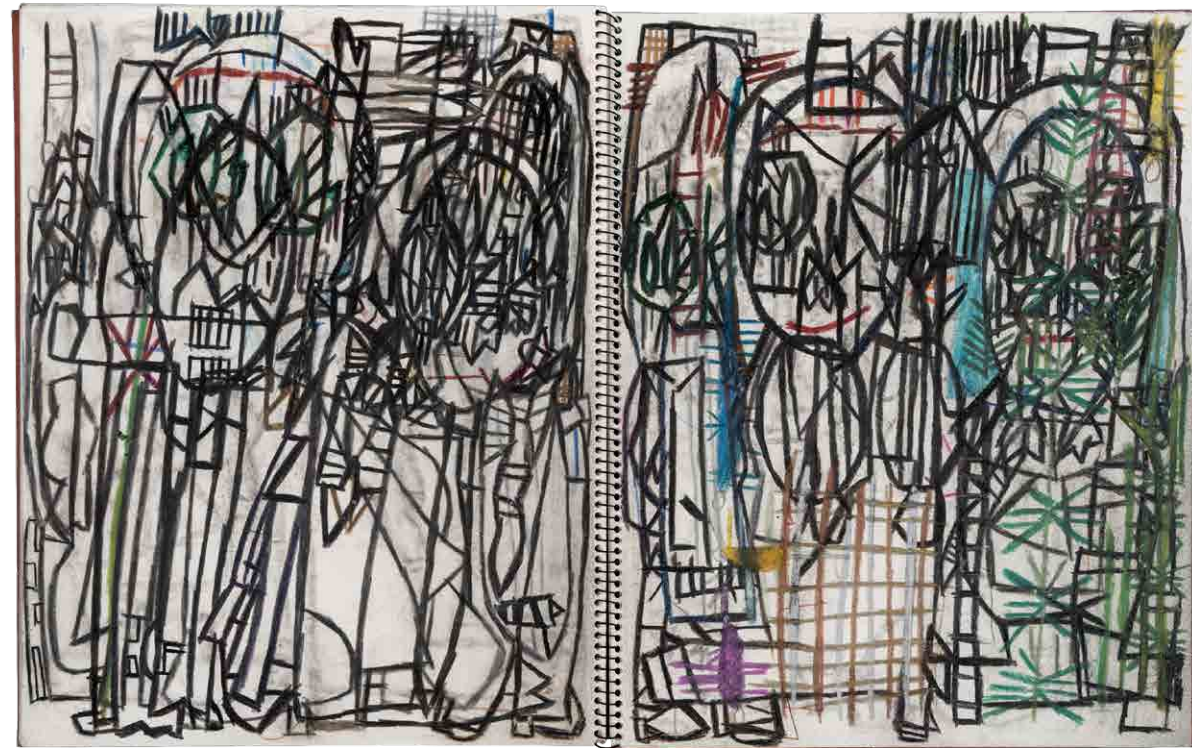


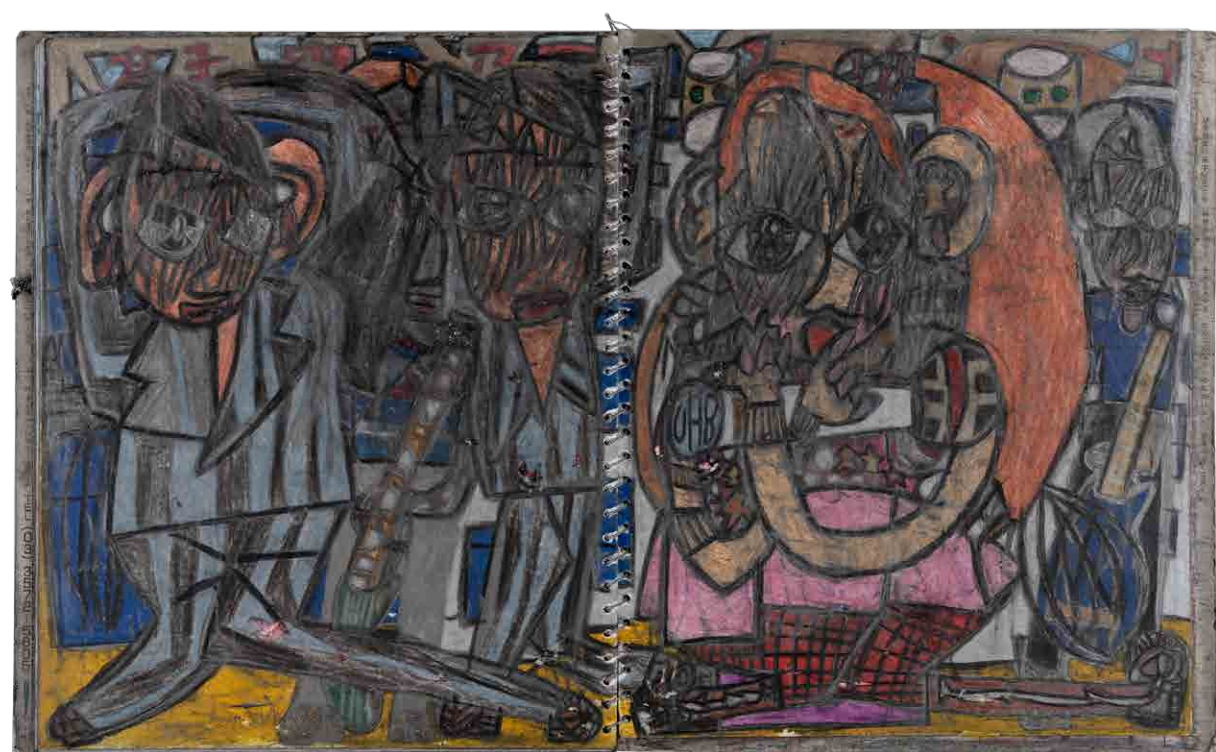
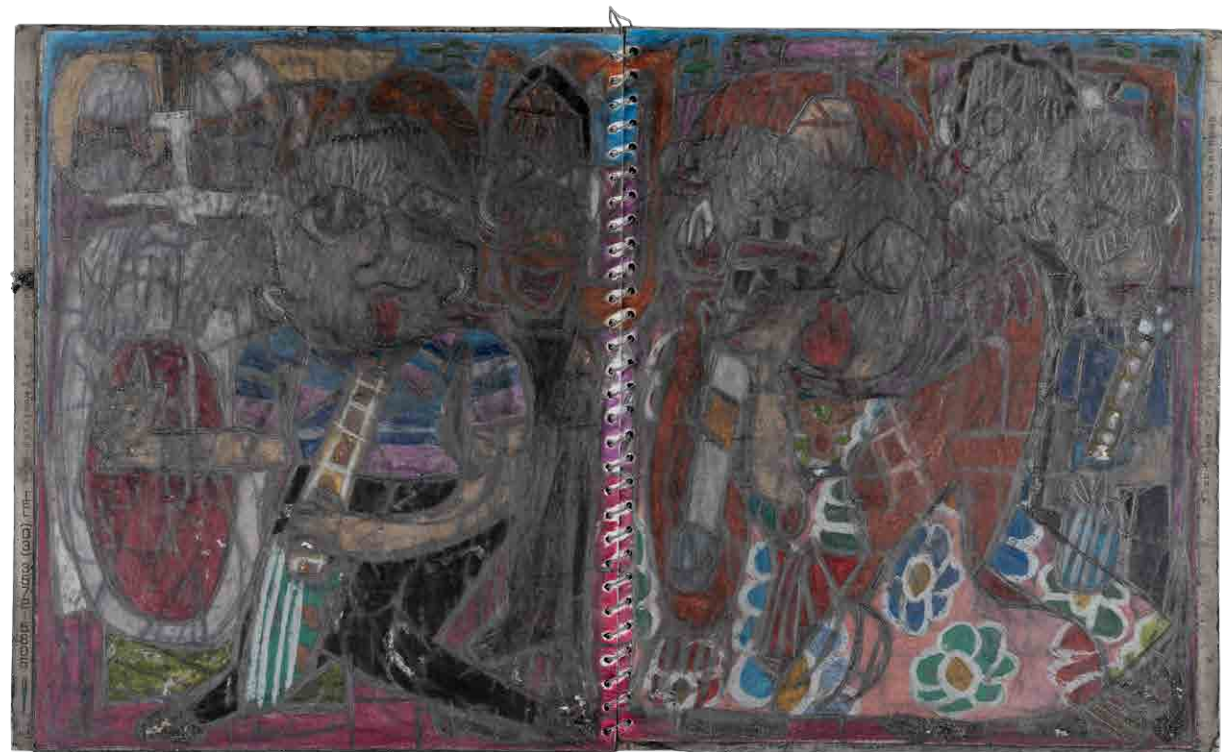


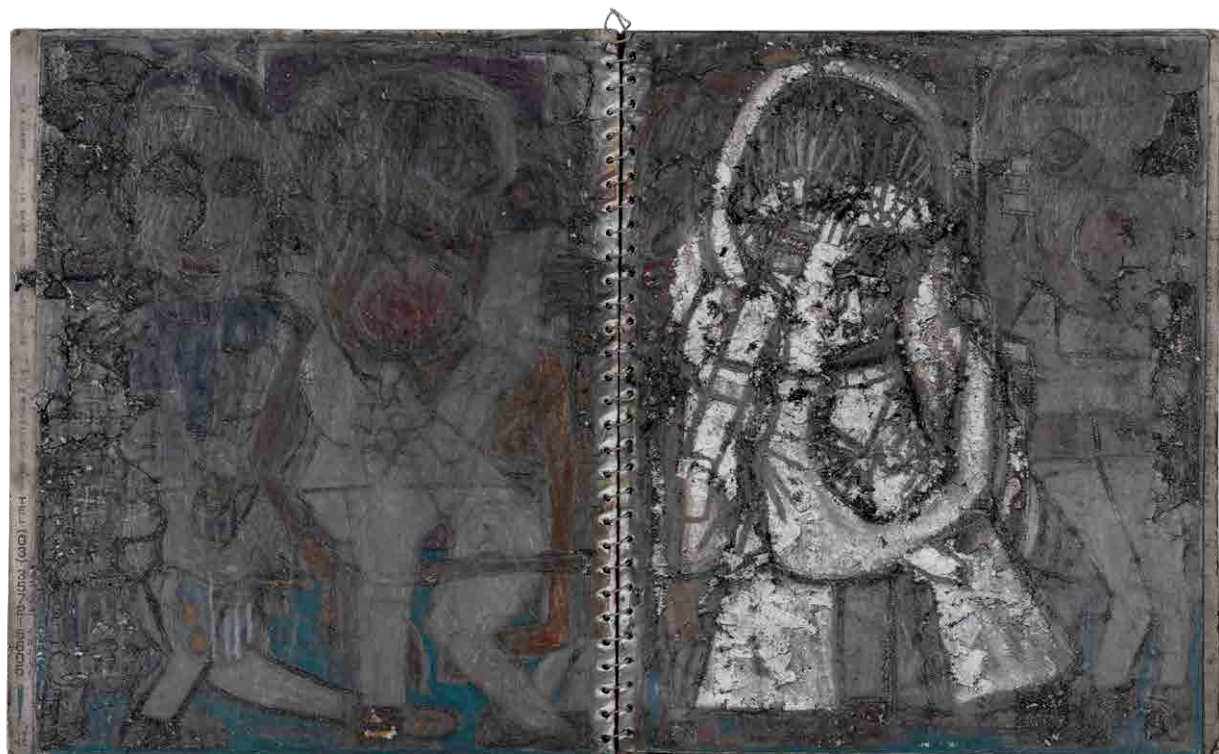
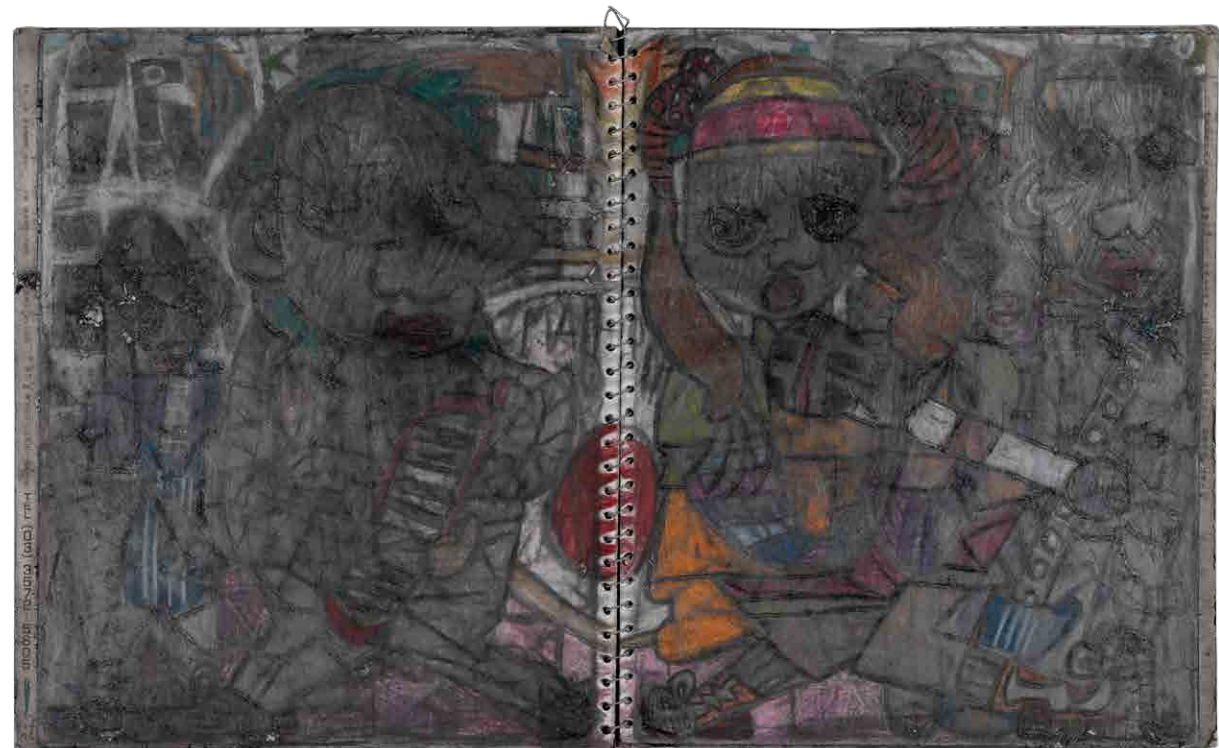














キュレーターによる展覧会ステイトメント：
「君のための絵」

多くの人にとって、何かを描きたいという気持ちの芽生えは、「好き」という感情と繋がっていたのではないのでしょうか。乗り物や動物、アニメのキャラクターやアイドルたち。描くことは、そうした好きなもの世界と繋がるための大事な方法でした。私たちの多くが知りながら、いつしかどこかに置いてきてしまったこの感覚を、更新し続けてきたアーティストたちがいます。この展覧会で特に焦点を当てるのは、アイドルへの愛着を描いた作品です。阿部美幸は、好きな人との相合傘と、幸せの記号のようなチューリップの図像を、画面を埋め尽くすように、長きにわたり描いてきました。田湯加那子は、ディズニーランドでの楽しい一日を描いた最初の作品をきっかけに、力強い線で対象を捉えた膨大な量の作品を生み出してきました。本展では、彼女が自分の絵を確立していく過程で残した、好きなアイドルたちを描いた作品を展示します。

感覚や感情がメディアを通して交換されるこの時代に、自らの手でそれを表現し直そうとする彼女たちの営みは、私たちに、大きな世界に対する個の力を想像させてくれます。いわゆる「ファン・アート」とも地続きにあるこれらの作品は、「愛」という芸術に馴染み深い主題の現代的な表現でもあります。「推し」へのラブレターでもあり、溢れる自分の想いの受け皿でもあり、さらにはそうした閉じた関係を越えて、見るものに共感を促す彼女たちの作品は、人はなぜ表現するのかという大きな問いに対し、幾つもの答えを教えてくれるはずです。

作品リスト

阿部美幸

p. 7
チュールリップと相合傘
2009年
382×542mm
水彩、ボールペン、
マーカー、紙



p. 8
チュールリップと相合傘
2009年
382×542mm
水彩、マーカー、紙



p. 9
チュールリップと相合傘
2010年
383×542mm
色鉛筆、マーカー、紙



p. 11
チュールリップと相合傘
2010年
382×541mm
色鉛筆、水彩、マーカー、紙



p. 13
チュールリップと相合傘
2011年
382×542mm
色鉛筆、水彩、ボールペン、
マーカー、紙



p. 14
チュールリップと相合傘
2010年
382×542mm
水彩、ボールペン、
マーカー、紙



p. 15
チュールリップと相合傘
2011年
383×542mm
色鉛筆、ボールペン、
マーカー、紙



p. 16
チュールリップと相合傘
2011年
382×542mm
色鉛筆、ボールペン、紙



p. 17
チュールリップと相合傘
2013年
385×542mm
色鉛筆、ボールペン、紙



p. 20
スケッチブックより
2022-2023年
F8サイズ (457×390mm)
色鉛筆、マーカー、紙



p. 21 左
スケッチブックより
2022-2023年
F8サイズ (457×390mm)
色鉛筆、マーカー、色紙、
包装紙、紙



p. 21 右
スケッチブックより
2022-2023年
S115サイズ (420×297mm)
色鉛筆、マーカー、紙



p. 22
スケッチブックより
2022-2023年
F8サイズ (457×390mm)
色鉛筆、ボールペン、
マーカー、紙



p. 23
スケッチブックより
2022-2023年
F8サイズ (457×390mm)
色鉛筆、ボールペン、マーカー、
色紙、紙



p. 24 上
スケッチブックより
2022-2023年
F8サイズ (457×390mm)
色鉛筆、ボールペン、
マーカー、紙



p. 24 下
スケッチブックより
2022-2023年
F8サイズ (457×390mm)
色鉛筆、ボールペン、
マーカー、紙



p. 25
スケッチブックより
2022-2023年
F8サイズ (457×390mm)
色鉛筆、マーカー、紙



田湯加那子

p. 28 左
タイトル不明
2005年頃
343×250mm
色鉛筆、紙



p. 28 右
タイトル不明
2001年
364×257mm
色鉛筆、マーメイドボード



p. 29 左
タイトル不明
2000年
364×257mm
色鉛筆、マーメイドボード



p. 29 右
タイトル不明
2003年
364×257mm
色鉛筆、マーメイドボード



p. 30
タイトル不明
2002年
364×257mm
色鉛筆、マーメイドボード



p. 31
タイトル不明
2001年
515×728mm
色鉛筆、マーメイドボード



p. 32
タイトル不明
2001年
515×728mm
色鉛筆、マーメイドボード



p. 33 上
タイトル不明
2001~2003年頃
515×728mm
色鉛筆、マーメイドボード



p. 33 下
タイトル不明
2001~2003年頃
515×728mm
色鉛筆、マーメイドボード



p. 34
タイトル不明
2001年
515×728mm
色鉛筆、マーメイドボード



p. 35 上
タイトル不明
2007年
240×335mm
色鉛筆、紙



p. 35 下
タイトル不明
2007年頃?
240×335mm
色鉛筆、紙



p. 36
タイトル不明
2010~2013年頃?
386×267mm
色鉛筆、紙



p. 37
タイトル不明
2014~2015年頃?
240×255mm
色鉛筆、紙



p. 40
スケッチブックより
2010年~
F6サイズ (407×320mm)
色鉛筆、紙



p. 41 上
スケッチブックより
2010~2015年
F8サイズ (452×379mm)
色鉛筆、紙



p. 41 下
スケッチブックより
2015年~
F6サイズ (407×320mm)
色鉛筆、紙



p. 43
タイトル不明
~2023年6月
238×298mm
色鉛筆、写真集



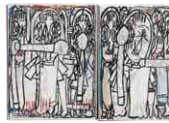
p. 44
タイトル不明
~2023年6月
238×298mm
色鉛筆、写真集



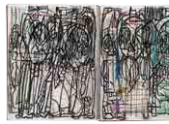
p. 45
タイトル不明
~2023年6月
238×298mm
色鉛筆、写真集



p. 46 上
スケッチブックより
2010年~
F6サイズ (407×320mm)
色鉛筆、紙



p. 46 下
スケッチブックより
2010年~
F6サイズ (407×320mm)
色鉛筆、紙



p. 47 上
スケッチブックより
2015年~
F6サイズ (407×320mm)
色鉛筆、紙



p. 47 下
スケッチブックより
2010年~
F6サイズ (407×320mm)
色鉛筆、紙



p. 48 上
スケッチブックより
2010年
4Fサイズ (310×240mm)
色鉛筆、鉛筆、紙



p. 48 下
スケッチブックより
2010年
4Fサイズ (310×240mm)
色鉛筆、鉛筆、紙



p. 49 上
スケッチブックより
2010年
4Fサイズ (310×240mm)
色鉛筆、鉛筆、紙



p. 49 下
スケッチブックより
2010年
4Fサイズ (310×240mm)
色鉛筆、鉛筆、紙



p. 50 上
スケッチブックより
2010年
4Fサイズ (310×240mm)
色鉛筆、鉛筆、紙



p. 50 下
スケッチブックより
2010年
4Fサイズ (310×240mm)
色鉛筆、鉛筆、紙



p. 51 上
スケッチブックより
2010年
4Fサイズ (310×240mm)
色鉛筆、鉛筆、紙



p. 51 下
スケッチブックより
2010年
4Fサイズ (310×240mm)
色鉛筆、鉛筆、紙



p. 53 上
スケッチブックより
2010年~
F6サイズ (407×320mm)
色鉛筆、紙



p. 53 下
スケッチブックより
2010年~
F6サイズ (407×320mm)
色鉛筆、紙



「君のための絵」を受け取るために

藪前知子

1. はじめに

本事業は、現代美術の領域で活動してきたキュレーターが、主に障害のあるアーティストの作品をリサーチの上キュレーションして展覧会を開催し、その活動領域の拡張に寄与することを目的としている。障害のある人や美術教育を受けていない人の表現に注目するために発展したアール・ブリュットの領域は、現代美術とは異なる文脈のもとに展開してきたと言える。日本では特に近年、障害者の表現活動を、福祉や教育の観点から、この呼称のもとに独自の領域として推進していく動きが顕著である。私のようなキュレーターにとって、アール・ブリュットとは、普遍性やグローバリズムを標榜しながらも、実は偏狭な領域であるという現代美術の限界を突きつけてくるような「他者」であり続けてきた。とすれば、この展覧会のキュレーションは、二つの領域を対照しながら、アール・ブリュットにまつわるさまざまな（筆者が自明のものと思っていた）概念を解きほぐし、相対化し、両者に新たな視点を導入することを目指さなく

てはならない。本稿は、この手に余るプロジェクトを実現する過程で私が考えたことを辿るものである。

2. 主体性とは

アール・ブリュットについてのリサーチの初期において、私のなかにあった数々の戸惑いのなかで、最も大きなものは、作家の主体性にまつわるものであった。障害のある作家たちの個性には、当然、その症状や身体能力に応じた多くのバリエーションがある。しかし多くの場合、その制作環境が、素材や手法、主題の選び方に大きな影響を与えていることは言えるだろう。何が作品なのか、誰が作家であるのかが、作家本人の意志以上に、彼／彼女を取り囲む社会的な仕組みによって決定されることが、しばしばこの領域に見られる特徴である。その画材や手法を、伝えたり手渡したりするプロデューサー的な存在の作品の質への影響について、どのように考えれば良いのか。彼らもまた「共同制作

者」ではないのか、といった疑問が、私のなかに渦巻いていた。

このことから、私が最初に制作環境も含めたリサーチをお願いしたのは、愛知県の「さふらん生活園」でコピー機を使って作品を制作してきた作家、井口直人だった。1日に1度か2度、職員と時間を決めて近所のコンビニエンスストアに出かけ、そのコピー機の2色刷りの機能を使って、手元にある気に入った素材とともに、自分の顔も台に載せて写し、斬新なイメージを作り上げてきた作家である。生活のルーティンのなかに制作があり、そこにその時々の自分の顔を映り込ませるといった日記やライフログのような時間の感覚に加え、私の興味を引いたのは、彼の表現が、第三者の手を借りず（代わりにコピー機の力を借りて）、自立して作品を生み出しているように見えたことである。作品の主題、手法、制作過程の選択において、井口という作家の「主体性」については疑いようのないものがあった。

一方で、実際に訪れ話を聞いてみると、井口作品の特徴である2色刷りという手法の選択には、それがモノクロと同じ金額でコピーができるという、経済的な理由が大きく関わっていることがわかった。制作の現場に立ち会わせてもらおうと、理解のあるコンビニエンスストアが、彼が危険なく移動できる徒歩圏内にあるという都市環境も、彼の活動を支える重要な条件であるのだと感じた。つまり、私が「主体的」と考えていた彼の表現にも、その生産環境が大きく影響を与えていたのである。このことは、私に、アール・ブリュットと現代美術とを分けると考えていた境界の揺らぎをもたらした。現代美術の作家たちもまた、画材やメディウム、主題や

活動フィールドを「主体的に」選んでいるように見えるが、実際にはそこには、教育、地理、経済など複合的な環境的条件が影響を与えているのではないか。

この当たり前の事実に基づいた後に、改めて考えてみると、「主体的な制作」、「作りたいから作る」という純度の高い制作意欲は、ジャン・デュビュッフエがその概念提唱において重視したように、アール・ブリュット、あるいはセルフポートと言われる作家たちに、一般的に結び付けられていることに気づく。制作環境が他者によって決められるという状況は、彼らがそのような、いわば属人的な選択から解放されているということを意味する。さらにいえば、そうした「プロフェッショナルではない」作家たちの制作動機は、その結果としての驚異的な集中力や密度と結びつけて語られ、アール・ブリュットの評価基準の一つを作ってきたとも言える。

さて、リサーチの過程で、本事業の共同ディレクターであり、またみずのき美術館のキュレーターとしても多くのアール・ブリュットの現場に関わってきた奥山理子との雑談で、女性作家の少なさについて触れる機会があった。この経緯については彼女が別稿で詳しく触れているが（p. 65）、ここで示されているように、障害のある女性の多くは、絵筆をとって制作活動をするよりも、例えば料理や手芸のような、生活を整える活動によって表現欲求を満たされているのではないかという仮説を聞いた。周知のように、近年、近代以降の美術史が抑圧してきた諸表現を掘り起こし、複数の文脈が絡み合ったものとして歴史を編み直すという傾向はますます強くなってきている。例えばモダニズム運動に対する見直しのなかでも、女性作家たち

の再評価と、彼女たちが携わっていた、絵画や彫刻だけではない、手芸や工芸、家事に隣接する表現活動にも注目が集められてきた。

そうした女性たちの表現のなかに、大文字の芸術の輪郭線をほぐすものが生まれてきたことを踏まえた上で、アール・ブリュットの領域で、私の目に止まったいくつかの表現があった。アニメのキャラクターやアイドルなど、メディアを通して触れる他者をモチーフに描いた作品である。女性に限らず、活動空間に制約のある障害を持った作家たちにとって、メディアを通して見る世界は、手軽に触れることができ、また刺激に満ちている点で、格好のモチーフになりうることが想像できた。一方で、女性作家の場合、可愛くてかっこいいアニメのキャラクターなど、モチーフの選択に「憧れ」という感情が前面に出ているように見えたことが印象的だった。これらは、アール・ブリュットとして括られる環境のなかで生み出されつつも、アニメやアイドルのファンたちが描く、いわゆるファン・アートとして見ることもできる作品である。憧れや愛着とともに、誰もが子供時代にノートや机の片隅に描いたことがあるであろう絵、それらと地続きにある作品とも言える。

そもそも、ポップ・カルチャーの引用は、ポップ・アート以降の現代美術の主要な手段である。しかしそれを除いても、例えばミュージシャンやアーティストなど憧れの人物を描いてきたアメリカの画家エリザベス・ペイトンのように、ファン・アートとの境界にある作品で注目されてきた作家たちもいる。憧れに触れるという、絵を描くことの原初的な喜びから生み出された作品は、アール・ブリュットと現代美術の間に横たわる無数の表現活動を代表するもので

あり、「主体的であること」の意味の違いという、二つの領域のあいだの溝を超えてくれるもののように見えた。その方向でのリサーチを進めるうちに出会ったのが、今回の出品作家である田湯加那子と阿部美幸の二人の作家たちである。

3. 批評的であることとは

田湯加那子の作品をまとめて見ることができたのは、彼女の地元である北海道・白老で開催された、2023年の「ROOTS & ARTS SHIRAOI」という文化観光プロジェクトにおいてであった。小学校の一角に、最初期から近作を含む代表的なシリーズ、スケッチブック、使用してきた画材、さらには、かけらほどに短くなったクレパスを詰めた瓶が並ぶ机に座って、制作に没頭する自宅の日々の生活を捉えたドキュメンタリービデオまでが紹介され、作品が生み出される過程も含めて、その表現活動の全貌を明らかにした展示だった。そのなかでも重要なものに、ドイツニーランドに行った思い出を模造紙いっぱい描いた、小学校4年生の時の作品があった。「とつてもたのしかった東京ドイツニーランド」という文字の周りに、ミッキー・マウスをはじめとするキャラクターたちが楽しそうに並び、左端には、笑顔の家族の姿も描かれている。現在の彼女の絵に通じる、力強く迷いのない描線とともに、印象的なのは、「みちすじ」という文字とともに、移動手段である飛行機などのイラストや、航空券が貼り付けられていることだ。その下に鉛筆で書かれた文章には、もっぱらこの旅でどんな乗り物に乗ったか、車窓から見えた風景の感想などが描かれている。キラキラし

た夢の国と自分の住む世界との距離、異なるその二つの世界が繋がる道程が、彼女の興味のかなかにあるのが想像できる。その後、彼女は自分の絵を確立する過程で、その「キラキラした世界」を探求し始める。彼女はここから、正面を向いた人物たちが画面いっぱいに並ぶ独自の様式を確立し、特に本展出品作のような、女性アイドルたちが歌う堂々とした姿を力強い線で描いた印象的な作品群を生み出すようになる。それは、遠くにある世界を、鉛筆で自分の部屋の机の上に手繰り寄せるような営みと言えるのではないだろうか。

阿部美幸もまた、遠くにいる憧れの誰かとの距離を、手を使ってひたすら埋めることを制作の動機としてきた作家である。彼女の手法は、好きなアイドルと自分との相合傘とチューリップで画面いっぱいを埋め尽くし、周りの空間を色鉛筆で彩るというものだ。相合傘とチューリップは、繰り返し描かれるうちにほとんど記号のように抽象化されている。埼玉県の工房集を訪ねた折、作品を楽しそうに見せてくれた彼女は、私たちに、そこに登場する人物について、お気に入りのジャニーズのアイドルだけでなく、施設のスタッフや友達の名前も交えながら教えてくれた。ギリシア神話や旧約聖書のアダムとイヴの物語まで辿るまでもなく、「愛」とは芸術の根幹を貫く主題である。しかし彼女の作品は、「愛」をモチーフとして表象、あるいは対象化したものではない。それは描きながら「愛」を送り続けるという、祈りに似た行為であり、インドの女性たちが祈りを込めながら描くコーラムなどの紋様のように、宗教と結びついた創作も彷彿とさせる、絵画としての強いオリジナリティを持っている。

本展では、初日にアイドル愛好家で画家の松村早希子とのトークを行った。「かわいい」「憧れ」という感情に突き動かされて描いてきた自分にとってのアイドルたちの絵を、フェミニズムなど自分に内面化されている価値観の問い直しも含めて、「私を作ってきたもの」を考えるために描いてきた作家である。ファン・アートでありつつも、ファンダムの間で流通するのではなく、より広い観客に向けて発信される彼女の作品は、現代美術とファン・アートの境界に揺らぎをもたらしつつ、今回の出品作家の二人の作品の理解にとっても有効な参照項を与えてくれるものであった。松村からは、それぞれの領域の評価基準の違いなどが、宗教画などの比較を伴いつつ有効な論点として出された。

そのなかで松村から出されたトピックの一つに、現代美術の定義としての「批評性」があった。モダニズム以降の美術史は、作家たちが、今自分が生きている時代についての批評的な営みの連鎖によって編まれてきたのは周知の通りである。今この時代を表す「近代（モダン）」が「現代」という新たな言葉に取って代わられたのちも、私たちの生きる時代とは何かを考えるきっかけを与えることがその存在意義の大きな部分を占めてきた。一方、これに比べて、アール・ブリュットやファン・アートは、そうした批評的意図からは切り離されているように見える。

しかし、先に触れたように、二人の作品は、メディアを通して現れる他者に対する愛着と、その距離を手を動かすことによって埋めることに動機づけられている。それはあらゆる感覚や感情を、メディアを介して交換する時代を生きる私たちにとって、自分たちの時代についての

証言とも言える貴重な表現ではないだろうか。彼女たちは作ることによって、向こうにいる存在をリアルな自分の感覚に置き換え、その距離を乗り越えようとする。作ることによって、彼女たちは確実に生きやすさを得ているのではないかと想像する。それは自分たちを取り巻く社会的な構造に対する、彼女たちなりの抵抗の作法であり、すぐれて批評的な行為ではないだろうか。メディアを通してしか触れ得ない他者に対する、切なさを伴った彼女たちの作品は、「愛」という芸術の根源的なテーマの、すぐれて現代的な表現である。

4. アイデンティティとは

さて、ここで私ごとになるが、ファン・アートに注目した動機の一つには、私自身がアイドルのファンであり、近年AI技術も伴ってインターネット上に膨大に拡大するその表現世界を興味深く観察してきたという経緯がある。ファン・アートは、好きなもののネットワークを介して人々を繋ぐ、ユニークなコミュニケーションの手段でもある。今回の展示では、アイドルのアートディレクションも手がけるデザイナーのいすたえこにお願いして、グラフィックだけでなく、入り口の暖簾やアクリル・スタンド、缶バッジなどを制作して、好きなものに囲まれた女の子の部屋、いわゆる「押し部屋」のような雰囲気を作ってもらった。

私にとって今回、最も大きな喜びとなった出来事の一つは、あいにく立ち会えなかったものの、その部屋に、北海道と埼玉県から、二人の参加作家がそれぞれ遠路この京都のHAPS

HOUSEまで展覧会を見にきてくれたことだ。会場には、松村早希子が自身のアイドルについてイラストと文章で綴ったZINEが置かれていた。田湯加那子がそれを見ている写真を目にした時、私のなかにすとんと落ちてきた感慨は、松村も含めた彼女たちが、例え対面で会ったことがなくても、絵を通して繋がっているということだった。

冒頭で述べたように、日本におけるアール・ブリュットとは、特に障害のあるアーティストたちの作品を指すことが多い。それは、その領域において紹介される作家を、障害がある人という一つのアイデンティティに閉じ込めてしまうことにもなるだろう。しかし、人間は本来、複数のアイデンティティの集合体であるはずである。この部屋のなかで、彼女たちは、画家であると同時に、アイドルや歌の世界が好きな女の子でもあった。その写真は私に、ピンクとミントグリーンをキーカラーとするこの展覧会場が、障害のある無しを超えて、彼女たちの世界に感応する人たちのささやかな連帯の場になる可能性を示してくれるものだった。アイドルのファンである私もまた、彼女たちのアイデンティティと自分のそれが部分的に共有されていることを感じながら、その作品に、自分自身の感情の動きを重ね合わせることになったのである。

5. 終わりに

リサーチの過程で、アール・ブリュットを専門とする鞆の津ミュージアムを視察した際、同館のキュレーターである津口在五と、本事業の共同ディレクターの奥山理子が、「福祉の側か

ら芸術という概念を使い倒す」可能性について話してくれた。本来なら、症例の現れとして治さなくてはならないかもしれないような個人のこだわりや癖が、芸術という方法によって、創造的な行為へと変化する。このことは私にとって、アール・ブリュットという領域を考えるにあたっての一つの風穴が開いたような出来事となった。そこで私は、公立美術館の学芸員として働いてきた自分が、今回のプロジェクトに際して、ずっと抱えてきた後ろめたさの正体に気づくことになる。それは、展示という行為において、障害を持った作家たちの多様な表現活動を、美術館をはじめとする既存の制度の側から価値づけ、型にはめてしまうことの恐れであった。しかし実際には、そのような発想自体が、権威的な言い訳であったのだ。自分が作ったものを見せること、それを通して他者と繋がることに喜びを感じる彼女／彼らに、その枠組みを、「使ってもらう」ように整えること。キュレーシ

藪前知子(やぶまえ ともこ)

キュレーター、東京都現代美術館学芸員。主な企画に「大竹伸朗 全景1955-2006」(2006年)、「山口小夜子 未来を着る人」(2015年)、「おともこどもも考える ここはだれの場所?」(2015年)、「MOT アニュアル2019 Echo after Echo: 仮の声、新しい影」(2019-20年)、「石岡瑛子 血が、汗が、涙がデザインできるか」(2020-2021年)、「クリスチャン・マークレー トランスレーティング [翻訳する]」(2021-2022年)など。札幌国際芸術祭2017など外部企画のキュレーターや、美術を中心とした評論活動で寄稿多数。

ョンが、「選ぶ」だけではない、双方向的な何かとして見えてきた瞬間だった。

「キュレーションを公平に拡張する」という語を掲げたHAPSの本プロジェクトは、「芸術家」や「作品」という概念が、自明のものではなく、キュレーションの過程において、その都度考察され更新されるべきである、というコンセプトに基づいて実施されている。これまで見てきたように、障害を持った人というだけではない、複合的なアイデンティティによって生み出された彼女たちの表現を通して、少なくとも私は、自分たちの時代について考え、さらには自分自身をもそこに投影して見ることになった。おそらく展覧会場を訪れた多くの人が、自分がかつて描いた絵と繋がるようなこの感覚を、受け取ったのではないかと思う。「君のための絵」と名づけられた展覧会が、そのような共有の可能性に満ちたものであったことを願う。

女性作家とその制作環境について

奥山理子

本展は、阿部美幸と田湯加那子という二人の女性作家を招聘している。計画初期の段階で候補作家について検討を重ねる中、キュレーターから、女性の作り手が少ないのは何故かという指摘があった。考え得る事として、これまで障害のある人たちの表現の現場を見てきた私には、彼ら彼女らの生活環境が、制作の動機や継続と深く結びついているように感じられる。最終的に本展の構想には、女性の作り手の少なさという現状に対する問いかけをしたいというキュレーターの意志も少なからず反映されたため、ここでは、展覧会に招聘した二人の作家のケースを例に、このことについて補足的に述べることにしたい。

そもそも、障害のある人の割合は男性の方が多いことが分かっている。但しこれに関するさらなる言及はここでの論点ではないためこの程度に留めることとし、次に、施設や自宅で創作活動に参加する人の割合となると、かつての「みずのき絵画教室※」がそうだったように、男女比の差はさらに広がる傾向にある。

その理由の一つに、女性は家事への憧れや関

心を抱く場合が少なくなく、家族や職員と行う炊事や洗濯の時間を好んだり、同じ施設の他の利用者（障害のあるルームメイト）の世話を好んだりということは、よく見られることである。結婚や出産への憧れもあるだろう。しかし、無自覚にその状況を許容するのは危険だ。これは、昨今どの分野でも話題になっているジェンダー問題に共通することで、本来多様なあり方が尊重されるはずの福祉施設であっても、女性の家庭での役割が社会規範として植え付けられ、障害のある人の生活基盤にも影響していたのではないかと考えられる。

次に、制作環境についてだが、阿部が所属する「工房集」(埼玉県)は、創作活動を行う障害者支援施設の中でも、とくに発信力の高い施設の一つとして知られている。展覧会の主催、作品の貸出しや販売、そして商品化に至るまで、美術の専門家らの協力を得ながら、施設が総合的に活動を支え、積極的に発信する仕組みができおり、このように充実した環境が阿部の制作意欲に影響を与えていることは間違いないだろう。

一方で田湯は、自宅で黙々と制作している。母親の話によると、声を掛けなければずっと制作を続けてしまうのだそうで、あえて食事の時間を決めるなどして、生活リズムに適度なメリハリが生まれるよう心がけていると言う。田湯の作品は、家族が、出展の機会があるたびに様見真似で覚えたと言え、謙遜混じりに話しながらも、大切に保存、管理がなされている。しかし、今なお精力的に制作に取り組む田湯に対して、家族は、いつまで同じ環境で支援を継続できるだ

ろうかと不安も口にしていた。

阿部と田湯、それぞれに描くことと共にある日常だが、その環境は少なからず異なる。さらに、各地で実践されてきた障害のある人の創作活動とその変遷も、彼女たちに回り回って影響をもたらしていることだろう。そのことが、本展のキュレーションにおいてどのように参照されたかについては、キュレーターのテキストに譲りたい。

※障害者支援施設みずのき(京都府亀岡市)で1964年に入所者を対象に始まった活動で、画家で教育者の西垣篤一(1912-2000)が講師を務めた。1994年、同教室から6名32点の作品がアール・ブリュット・コレクションに収蔵されている。

奥山理子(おくやまりこ)

本事業共同ディレクター、みずのき美術館キュレーター、Social Work / Art Conferenceディレクター。1986年京都府生まれ。みずのき美術館の立ち上げに携わり(2012年)、以降企画運営を担う。アーツカウンシル東京「TURN」コーディネーター(2015-2018年)を経て、2019年よりHAPSの「文化芸術による共生社会実現に向けた基盤づくり事業」に参画し、相談事業「Social Work / Art Conference」ディレクターに就任(2020年~現在)。東京藝術大学Diversity on the Arts Project非常勤講師。

「君のための絵」

会期：2024年1月13日～2月12日(会期中の金土日祝のみオープン)

会場：HAPS HOUSE(京都市南区東九条東山王町1)

参加作家：阿部美幸、田湯加那子

ゲストキュレーター：藪前知子

アートディレクション：いすたえこ

展覧会の関連イベントとして、自分を作ってきたアイドルや「推し」たちの肖像を「ファン・アート」と「コンテンポラリー・アート」の境界を意識しつつ発表してきた画家の松村早希子と本展キュレーターが、それらいわゆる「アール・ブリュット」という領域との関係や、絵を通したコミュニケーションなどについて考えるトークを開催しました。トークのアーカイブ映像は、一般社団法人HAPSのYouTubeチャンネルで公開しています。

出演：藪前知子

ゲスト：松村早希子(画家/アイドル愛好家)

司会：奥山理子



アーカイブ映像



阿部美幸(あべみゆき)

1981年生まれ。埼玉県川口市にある社会福祉法人みぬま福祉会「川口太陽の家」に所属。2002年より、同法人が運営するアトリエにて絵を描き、併設のギャラリーにて発表するようになる。好きなアイドルの名前やキャラクターをカラーのボールペンで書き、色鉛筆で塗りつぶした上、その空間を相合傘やチューリップで埋め尽くすユニークな作品を制作してきた。2011年「ガールズミーティング」(マキイマサルファインアーツ、浅草橋)への参加を皮切りに、展覧会への参加多数。

田湯加那子(たゆかなこ)

1983年生まれ。北海道白老町在住。10歳の頃から、テレビで見た歌手や友達などを題材にした作品を集中して描くようになる。以後、人物画を中心に、力強い輪郭を持ったフォルムが空間を埋め尽くす独自の様式の作品を多数描いてきた。2005年の初個展以降、「すごいぞ、これは!」(埼玉県立近代美術館ほか、2015～16年)、「Art Brut et Bande Dessinée」(Collection de l'Art Brut - Lausanne、2022～23年)、「ROOTS & ARTS SHIRAOI」(旧社台小学校、2023年)などで作品を継続的に発表。

阿部美幸	2002年	織展「はじめまして集 風がふくIV」(工房集ギャラリー)
主な出品歴	2006年	「工房集のアーティストたち」(ヨコハマポートサイドギャラリー) 「太陽の家 工房集展」(川口市立アートギャラリー・アトリア) 「ユートピアの世界へようこそ」(M-Style、栃木県) 「風がふく15 工房集から外に出ました」(川口市立アートギャラリー・アトリア)
	2007年	工房集作品展「ところで、集って何ですか?「集」」(工房集ギャラリー)
	2008年	工房集作品展「ずーっと、つながっているような「集」」(工房集ギャラリー)
	2009年	工房集作品展「来てください「集」」(工房集ギャラリー)
	2010年	工房集作品展「熱くいきます「集」」(工房集ギャラリー)
	2011年	コラボレーション展「アートが生まれる場所」(川口市立アートギャラリー・アトリア) ガールズミーティング(マキイマサルファインアーツ、東京都) アンデパンダン展「生きる」(工房集ギャラリー)
	2012年	画楽プロジェクト Vol.3「アートと暮らし」(高知市文化プラザかるぽーと) 工房集作品展「生きるための表現」(東京都美術館) 「うふっ。どうしちゃったの、これ!?!」魅、観、見、実、身、末!!! (埼玉県立近代美術館)
	2013年	Vol.4 ポコラート全国公募展(アーツ千代田 3331、東京都)
	2014年	「集まる工房集展」(もうひとつの美術館、栃木県) 「こんな夢を見た」(マキイマサルファインアーツ、東京都)
	2015年	第6回障害者アート企画展「Discover あなたも見つけに」(埼玉県立近代美術館、埼玉県)
	2017年	「キットパスの皆画展」(パン・オ・スリール、東京都)
	2019年	第10回埼玉県障害者アート企画展「Knock art 10 ～芸術は無差別級～」(埼玉県立近代美術館、埼玉県)
	2022年	さいたま国際芸術祭2020「工房集問いかけるアート展」(埼玉会館、埼玉県)
	2021年	「アートパラ深川おしゃべりな芸術祭」(深川江戸資料館、東京都)
	2022年	第13回埼玉県障害者アート企画展「Coming Art 2022」(埼玉県立近代美術館、埼玉県)
	2023年	「阿部美幸展」(中和ギャラリー Gallery For You、東京都)
2024年	「君のための絵」(HAPS HOUSE、京都府)	

田湯 加那子	1998年	「いきいきこども絵画展」(北海道)
主な出品歴	2005年	個展(白老町創造空間「蔵」、北海道) 「加那子色えんぴつ画展」(苫小牧信用金庫三条支店、北海道)
	2009年	個展(むかわ町穂別喫茶・食事処「峰」、北海道)
	2010年	個展「かなはな展」(絵本屋「ぽこぺん」、北海道)
	2013年	「愛と加那子の絵画展」(ニセコ町 Café こむぎ野、北海道)
	2015年	個展「田湯加那子展」(Cafe Raw Life、北海道) 「すこいぞ、これは! This is Amazing!」(埼玉県立近代美術館ほか、～2016年) 「もうひとつの展覧会 田湯加那子 花の色彩」(Bilongo、北海道)
	2016年	「HOKKAIDO ART BRUT EXHIBITION ～こころとこころの交差点～」(ギャラリー大通美術館、かたるべの森美術館、北海道)
	2017年	「ロックとアートの蜜月な日々」(はじまりの美術館、福島県) ジャパンxナントプロジェクト 日本のアールブリュット「KOMOREBI」展(フランス国立現代芸術センター リュー・ユニック、フランス、～2018年)
	2018年	「第3回アール・ブリュット札幌展 ～声をかたちに」(鴨々堂、北海道)
	2019年	「北海道のアール・ブリュット～こころとこころの交差点」(北海道立帯広美術館、北海道) ニセコ・洞爺アール・ブリュットウィーク「感性のキオク」(toita、洞爺湖芸術館、北海道) 第5回東北障がい者芸術全国公募展「Art to You!」(せんだいメディアテーク、宮城県) 岩見沢アール・ブリュット芸術祭2019 日本のアール・ブリュット「KOMOREBI」展 in 岩見沢(イベントホール赤れんが、北海道) 「北海道のアール・ブリュット・No Art, No Life」展(まなみーる、北海道)
	2020年	ボーダレスアート in スカーツ(札幌市文化芸術交流センター SCARTS、北海道) 「アール・ブリュット～日本人と自然～」東京ほか全国巡回(～2021年)
	2021年	第3回 日本財団 DIVERSITY IN THE ARTS 公募展(Bunkamura Gallery / Wall Gallery、東京都)
	2022年	「Art Brut et Bande dessinée」(Collection de l'Art Brut-Lausanne、スイス)
	2023年	「どさんこ力」(もうひとつの美術館、栃木県) ROOTS & ARTS SHIRAOI「田湯加那子の軌跡」(旧社台小学校 1F、北海道) 北海道の福祉とアート Vol. 16 田湯加那子展「きらめき」(NAKAHARA DENKI Free Information Gallery、北海道)
	2024年	「君のための絵」(HAPS HOUSE、京都府)

本書は、一般社団法人HAPSによる展覧会「キュレーションを公平（フェア）に拡張する vol.2『君のための絵』」の記録として制作・発行しました。

展覧会
「君のための絵」

会期：2024年1月13日～2月12日
会場：HAPS HOUSE（京都市南区東九条東山王町1）

主催：文化庁、一般社団法人HAPS
制作：一般社団法人HAPS
協力：社会福祉法人みぬま福祉会 工房集、田湯憲明、田湯ひろみ

令和5年度
障害者等による文化芸術活動推進事業
公立美術館における障害者等による文化芸術活動を促進させるための
コア人材形成を軸とした基盤づくり事業パイロット事業

参加作家：阿部美幸、田湯加那子
ゲストキュレーター：藪前知子

ディレクション：遠藤水城、奥山理子
コーディネーション：佐藤真理
アートディレクション：いすたえこ
展示施工：蠶恒太郎、神馬啓佑

図録
発行日：2024年3月31日
編集：奥山理子、佐藤真理
デザイン：有佐祐樹
写真：守屋友樹（p. 40, 41 下）、沢田朔（p. 68）
印刷：イニユニック

発行元：
一般社団法人HAPS
〒605-0841
京都市東山区大和大路通五条上る山崎町339
E-MAIL info@haps-kyoto.com
TEL 075-525-7525
https://haps-kyoto.com/

©2024 HAPS 無断転載複写禁止 All Rights Reserved.

This Catalog is published on the occasion of the exhibition
Extend curation fairly vol.2: A Picture for You,
organized by General Incorporated Association HAPS.

Exhibition
A Picture for You

January 13–February 12, 2024
HAPS HOUSE (1 Higashi Kujo Higashi Sanno-cho, Minami-ku, Kyoto)

Organized by the Agency for Cultural Affairs and
General Incorporated Association HAPS
Production by General Incorporated Association HAPS
Cooperation with Minuma Hukushikai Kobo Syu, Noriaki Tayu, Hiromi Tayu

The project aiming to establish core human resources, including persons
with disabilities that will serve as the axis for promoting cultural and artistic
activities at public art museums, supported by the Agency of Cultural Affairs,
Government of Japan, fiscal 2023

Exhibitor: Miyuki Abe, Kanako Tayu
Guest Curator: Tomoko Yabumae

Direction: Mizuki Endo, Riko Okuyama
Coodination: Mari Sato
Art Direction: Taeko Isu
Exhibition Build: Kotaro Tategami, Keisuke Jimba

Catalogue
Published on March 31, 2024
Editors: Riko Okuyama, Mari Sato
Designer: Yuki Arisa
Photographer:
Yuki Moriya (except for p. 40,41), Saku Sawada (p. 68)
Printing: inuuniq Co., Ltd.,

Publisher:
General Incorporated Association HAPS
339 Yamazaki-cho, Higashiyama-ku, Kyoto
605-0841, JAPAN
E-MAIL info@haps-kyoto.com
TEL 075-525-7525
https://haps-kyoto.com/

HAPS



